

語り部ニュース

2009年5月号

発行 NPO法人舞鶴・引揚語りの会

住所 〒623-0133 舞鶴市字平舞鶴引揚記念館内
TEL0773-68-0568

第三回通常総会

平成二十一年五月十六日
舞鶴勤労福祉センター本館に於いて午前十時三十分審議開催（出席者二十名、委任状提出者十五名）され第一号議案から第四号議案まで審議され全て承認された。



第三回通常総会を終えて

中田理事長

今年度は昨年のように大きな事業を計画していません、総会でも話しましたが語り部活動の基本に戻り、記念館の語り部、養成講座、会員募集、講演紙芝等の活動を行うことで会員の親睦を図り語りの会の活動をより充実したものにしていきたいです。その為に、連絡網を作り緊急の連絡、語り部ニュースの発行、語りの会のホームページを作成していきます、活動を活性化させるためには会員の皆様の参加、ご意見をお願いします

第三号議案

平成二十一年度事業計画

一、基本方針

「語り部活動」の更なる充実に向けて昨年度は「企画展」「引揚最終船入港五十周年記念事業」「紙芝居の出前講座」等、対外的な活動に重点をおいて活動し、成果を上げてまいりました。

二十一年度は当会発足五年目を迎えるにあたり、足元を見直す意味から、語り部活動の更なる充実に向けた活動を展開いたします。言うまでもなく、当会の活動の基本は引揚記念館

での「語り部」活動です。全員一丸となってその活動を進めてゆく必要があります。

二、実施計画

（一）語り部養成講座開講（引揚記念館からの委託事業）本年度はこれまでの座学中心講座から実践に向けた講座に重点を置き、引揚記念館での講座を開講します。

（二）史実研修会（仮称）の開催について

会員講師による月1回の史実研修会を開催し、会員相互のレベルアップを図ると共に交流を深める物とします。なお研修会には養成講座受講生にも出席していただきます。

（三）「語り部」活動の研修

平和関連施設をはじめ他の施設、場所等で行われる「語り部」を見聞、交流する事により当会の語り部の充実を図ります。

（四）引揚記念館「企画展」開催への助成

引揚記念館が行う「企画展」については積極的に協力するものとします。

（五）出前講座、講演等への参加
依頼要請があれば参加、出席いたします。本年度より会員複数人で参加、出席するものとします。中心講座から実践に向けた講座に重点を置き、引揚記念館での講座を開講します。

養成講座開講



五月十六日午後一時三〇分より開講式を実施した。今期の応募者は九名、当日の出席者は七名でありました。今後一年間十講座の進め方及び舞鶴引揚語りの会の歩みなどをパワーポイントで説明した。

会員の活動

紙芝居原画展報告

私たちの願い
紙芝居で子どもたちに引揚を伝えよう
松岡幸代 樟 康

去る4月1日から8日までまいづ

る知恵蔵で開かれた「紙芝居原画展」、おかげさまで無事終了いたしました。知恵蔵の方のお話では、来館者は約700人とのこと。紙芝居作成に当たって、25枚もの絵を無償で描いて下さった山根由一画伯のご厚情に対して少しでも報いられたかと、ご協力下さった皆様に心より感謝している次第です。

戦争は兵隊さんだけが苦労されたのではない、女や子どもたちも巻き込まれたのだということを伝えたい。特にかの地で亡くなった幼子たちの悲劇を伝えたい。その一歩として、自分たちの体験を「紙芝居」にして演じようと思いはじめてから誕生までに丸2年。まさに生みの苦しみでした。

けれども、その間に、語りの会をはじめ、画家を探そうと奮闘して下さった「さん。山根画伯を紹介して下さい」と現に近づけて下さった「さん。やっと出来た原画を抱えて右往左往していたとき、テーター化などの道をつけてくださった「さん。貼り付け作業に協力して下さい」女性軍、仏教大学など京都市内の催に紹介して下さい「さん等々、どれだけ多くの方々の応援を頂いたことか。

ようやく形になった2編の紙芝居は、既存の2編とともに、昨年5月初めて記念館の玄関前で、京都の団体さんに見て頂いたのを皮切りに、実演回数16回。他に下関市など他都市でも利用していただきました。（詳細は先に豊田理事長にご報告しました。）

今回の「原画展」はその集大成。昨年、出来上がった紙芝居を持って、山根画伯の個展に伺ったとき、当時の赤れんが知恵蔵の館長から「原画展」を開いてはとのご提案がきっかけでした。

その後、アートサポーター会議に出席を要請され、その席で、会期は子どもたちが春休みの4月1日から8日まで、5日にワークショップを開くこと。そして会場が広いので、何か来館者に引揚を説明する展示をしてはとのご提案も頂きました。その上、スクリーンセーバーを使って、紙芝居2編をエンドレスで流していただけることにもなりました。そのための、DVD作成につきましては、豊田理事長のご了解のもと、偶然ですが、当会でも以前制作を依頼されたことのある、アートサポーター会議のメンバーである高宮氏に制作をお願いすることが出来ました。

開催準備当日は、我々2人と5人もの語りの会メンバーの応援を得て、紙芝居2編「さっちゃんの満州」「おさかなになった女の子」の原画25枚の他に、「おぼん」「命をつないで生きてきたんよ」の2編もパネル展示。また、舞鶴と引揚の関係を知らない若い世代の来館者のためにかつて記念館で展示されました「舞鶴市民と引揚」のパネルも中央に2列にわたって展示することが出来ました。（全員制服を着用していたせいか、とても存在感があり、知恵蔵の職員さんが「全員来

られたのですか?」と聞かれたくらいでした）

5日にはワークショップとして、子どもたち10名の他にそのお母さん、引揚体験者の女性お二人、舞鶴「つのお二人など約30名の方が来て下さり、紙芝居の後、子どもたちはお絵かきを、大人たちは山根先生を中心に、引揚だけではなく戦争そのものについて、いろんなお話しが持てました。中には昨年、図書館での実演に来てくれた、三笠小学校の児童クラブの皆さんが再度来て下さったようで感想ノートに「今は解らなくても、いつの日か何かを感じ取ってくれる日があらばと思います」と書いてありました。また「紙芝居、もっと、皆に見てもらいたい。みんな知らんことばかり。」と書いて下さった方もありました。

この度、先の二編に続いて、「命をつないで生きてきたんよ」「おぼん」の2編もDVD化していただきました。特に「おぼん」は登場人物が多いことから4人で朗読劇風にナレーションを入れました。「紙芝居で子どもたちに引揚を伝えよう」という私たちの思いが一人でも多くの方にご理解いただくことを願っております。今後ともよろしく願いいたします。



ガイドボランティア

森下昭夫

1年間の養成講座に参加後、引揚記念館でガイドの活動を初めて3年目、デビュー1年目、ため込んだ知識をいろんなお客様に披露、それなりの感触を得た。2年目からは少し趣が変わってきた。説明をしてあげたお客様、それも引揚げと何らかの関係のある、が戻ってきて今度はお客様が一方的に話し始めるのである。全てが理解できる訳ではないが相手の目を見、目をそらし、時に涙し、時に相槌をうちながら、ひたすらお客様の云われることを聞いてあげるのです。一気に話し終えた後の顔は実にさわやか。おそらく長い間若い家族にも話せずに心の奥にためていたことを、少しは理解してもらえる人に聞いてもらえた、というそんな顔である。その後深々とお礼を述べて帰って行かれる。こんな事が最近まある、これもガイドの仕事なのかと思うこの頃であります。

シベリア抑留体験者

原田次郎さん語る。

引揚記念館には余り行きたくなかった。今までに何度か足を踏み入れたのですが、何か切なさや、重苦しさで早々に表に出てました。語りの会に参加するようになり、会員の皆さんと話す内にこれまで近隣の自治会や団体から講演依頼があったのですが、思い出すのが辛く出来るだけ断っていました。昨年安国寺サロンの清子の里」から依頼を受け、シベ

リア抑留中の収容所生活や満州での終戦時などの話させていただきました。その後、不思議な事に気がきました。復員して六十年間、月に2、3回当時の夢を見ましてその夜は、目が冴えて寝付かれません。二日も続きますと翌日の仕事もありますので、医者から処方睡眠薬を永い間服用していましたが、今回の講演で終戦直後の無残で残酷な満州移民団の人々や病人の状況などを話し、さらに夢に出てくる苦悩を告白しました。皆さんから有難う、初めて聴かせていただいた」と声をかけられることが多くなると共に夢を見なくなりました。

（豊田）

4月の活動実績

稼動日数・・・30日
ガイド数・・・2,391人
予約数・・・10件
予約人数・・・257人
稼動会員数・・・21人
募金箱・・・73,858円

ご苦労様でした。

人事

理事長 中田照造
副理事長（会計）古橋ふみ子
事務局長 事務局養成講座）
谷口榮一
理事 養成講座）谷口久乃
理事 事務局語り部ニュース
理事 豊田信明

理事 運営語り部当番）

濱朗夫

理事 事務局体験者レポート）

森下昭夫

理事（会計）吉田かず子

連載

「兵卒のシベリア捕虜記」

著者・門間祐太郎
編集・南澤 武

昭和二十年（一九四五）五月から二十二年七月まで

傘寿を迎える歳になって、四十余年も昔の記憶を想い出して書くので、誤っているところも多い事と思いますが、私にも、酷寒の凍結された地で、七百八十余日の苦しかった捕虜生活の経験があります。カルロ・シュタイネル氏の「収容所列島」程の過酷な話には及びませんが。

召集令状

満二十歳になったので、（私は当時旧制高等学校に在学中でした）国の定めた国民の果たすべき三大義務の一つ、兵役の義務の徴兵検査を東京市日本橋区で受けました。「第二乙種に合格、但し要員超過につき兵役を免除」という有難いお墨付きを頂ました。そのため、今にも直ぐ「命が無くなるんだ」という、切迫感は遠退きました。ところが我々の言う戦争大東亜戦争（第二次世界大戦）が激化するにつれて、いつの間にか私の兵役免除の特例も反故となり、昭和二十年（一九四五）

五月十五日に、三カ月間の教育召集という赤紙が来て、私も大日本帝国軍人の一員に数えられることになりました。

昭和二十年五月十五日午前十一時頃、六十三歳になる母に、「三カ月間の教育召集ですから暫くの間留守を頼みますよ」といって天照大神をお祀りしてある新京神社へ、妻と三歳、五歳、七歳になった子供達を連れて大きな馬車に乗って行きました。丁度、春季大祭の時であり、久方振りの親子連れなので、子供達は大騒ぎでした。その後、私と永い別れとなることも知らず、首都警察署の通用門で手を振って別れました。

時も時、その前日（五月十四日）私は奉天にある私の働いていた建設会社の本社大広間で行われた、出征する社員員の壮行会で勇ましくブツテいた最中、私にも赤紙が来て、翌十五日午後一時に新京（旧満州）で入営する事になりました。（次号へつづく）

編集後記

◎ 語り部ニュースは会員の皆様の情報共有が目的です。永く続けるため、皆様の投稿を期待しています。
◎ また編集に際し、意見提言お寄せください。
◎ 総会、養成講座の写真は浜さん提供です。